

キルギス情勢

2010年4月21日 外務省歐州局

【今次政変の背景】

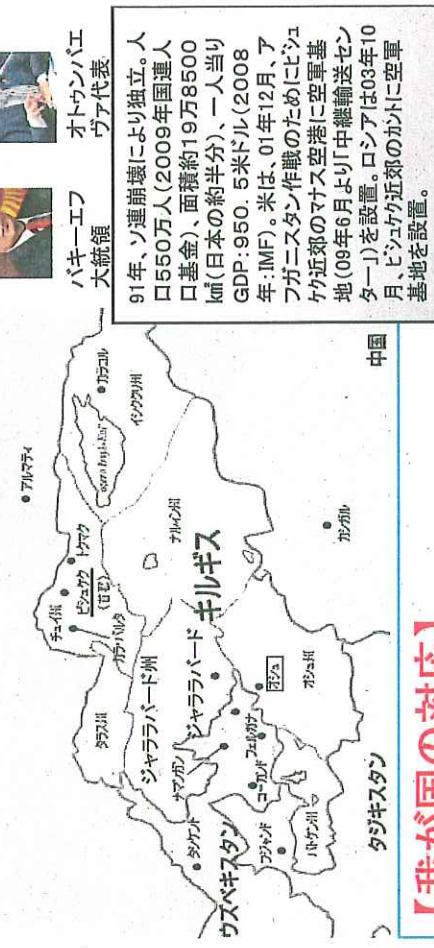
独立以来、資源乏しく経済基盤は脆弱。05年の「チュー
リップ革命」により就任したバキーエフ大統領は、強権的統
治及び親族・側近登用を強化し、汚職が蔓延。世界金融危
機による経済低迷、最近の公共料金値上がりにより、国民生
活は困窮。国民の不満が頂点に達し、反政府運動が高揚。

【経緯】

-6日、キルギス北西部タラズ州において数千人規模の反政府
集会、同州庁舎の一時占拠が発生。反政府運動がキルギス
全土へ拡大。
-7日、首都ビシケクで数千人規模の反政府集会、反政府デ
モ隊と治安部隊の衝突が発生。バキーエフ大統領が非常事態
宣言を発令。政変による死者84名、負傷者千名以上(17
日保健省発表)。

-8日、オトクンバエヴァ社会民主党党首(元外相)を首班とする
暫定政府が発足。
-南部ジャララバートへ逃れた「バ」大統領は、辞任拒否を表明。
-15日、「バ」大統領は、辞任を受け入れ、家族を伴いカザフスタン
南部のタラズへ出国。右出団は、カザフスタン(OSCE議長国)、米、
露、OSCEの仲介により暫定政府と「バ」大統領が合意に至つ
たもの。

【主要国の対応】



【我が国の対応】

-7日、在キルギス日本大使館に緊急対策本部(本部長:
丸尾駐キルギス大使)、外務本省に連絡室を設置(室長:
谷崎欧州局長)。渡航情報(スポット情報)を発出。
-8日、外務報道官談話を発出、事態に対する憂慮の念と
一刻も早い事態収拾に対する期待を表明。在留邦人約
130人の無事を確認。
-16日、外務報道官談話を発出、大統領出国による情勢
の正常化と合法的かつ平和的プロセスによる民主主義
及び憲法秩序の回復に対する期待を表明。

【主要国の対応】

-7日、ブーリン首相はオトクンバエヴァと電話会談し、支援を
表明。同日、カト露空軍基地に約150名の空挺部隊を派
遣。
-14日、ブレイク米国務次官補が現地入りし、支援を表明。
(※16日、暫定政府はマナス中継輸送センターについて、
当面は米空軍による現状の使用を認める立場。)

【今後の注目点】

オトクンバエヴァ代表は、3ヶ月後に憲法改正、さらに3ヶ月後
に民主的な大統領選挙、議会選挙、政権打倒後も團結を維持できるか、財政
難の下で経済の立て直しを図れるかが今後の安定化の鍵。